

社会問題を通して「政治的リテラシー」を涵養する

1 研究の内容

本校の社会部では、「政治的リテラシー」を涵養する観点から、現在は中学生や高校生から取り上げて指導されることが多い、社会問題、政治問題、時事問題を、あえて小学生という発達段階から、1年間の中で単元化して取り上げ実施している。

(1) 全体テーマ「学びをひらく」と社会科部テーマ「政治的リテラシー」涵養との関連

「政治的リテラシー」を涵養することで育てたい力は、自分とは異なる他者の考えに耳を傾け、他者の考えを排除することなく、自分の考えとの共通点や相違点について考え、自分の考えをさらに広げ・深め・高めることで、根拠をもった判断・意思決定を行う力である。このような学びには、これからの民主主義社会を担う市民の育成への可能性が秘められている。最終的には、「自分の中にいる異質な他者＝もう1人の自分」に問いかける自分へと自己を成長させることをねらいとしている。そのためには、独りでは考えも及ばない、様々な発想や思考に触れさせることが必要となってくる。そして、このような子どもたちの姿こそ、私たち社会部がイメージする「学びをひらく」という姿であり、同時に、社会部で育てたい究極の力＝「政治的リテラシー」を涵養することにつながると考える。

(2) 社会問題に向き合わせる意味と「政治的リテラシー」を涵養するとは

小学生にあえて、社会・政治・時事問題に向き合わせる学習経験が必要である理由を述べる。長年の議論の末、2016年に実施された18歳以上が投票できるようになった参議院議員選挙では、18歳の投票率が51.1%と、過去の選挙の20歳代より高い水準であることが社会調査によって分かった。しかし、その調査によれば、「政治についてよくわからない」や「どの政党や候補者に投票すべきかわからないから」という不安や戸惑いの声をあげた若者は約半数もいた¹。現在小学6年生の子どもたちも6年後には、日本の政治に参加する機会が来ることを考えた時、小学校の社会科として、積極的に、社会・政治・時事問題に向き合わせる学習経験を積ませていく重要性を主張したい。これからの社会を担っていく子どもたちに、今、実際の社会で何が起きているのか自ら関心を向ける力、社会の出来事を批判的に見る力、そして自分の考えをさらに広げ・深め・高めることで判断する力など、将来有権者になるために必要な力となる「政治的リテラシー」を涵養することが求められていると考えるからだ。

また、中教審答申(2016年12月)にも「社会の課題に気づき、課題を解決し、構想する力」の重要性が述べられ、それは私たち社会部が言う「政治的リテラシー」と同じことと捉えている。つまり、新『学習指導要領』社会科の目玉は、「社会に見られる課題について、社会への関わり方を選択・判断する力」、すなわち、社会を構想する力、つまり「政治的リテラシー」と考える。これからは、どの学校でも、「政治的リテラシー」を涵養する時代なのである。だからこそ、現代社会の中で実際に起きている社会・政治・時事問題を、発達段階や教材を踏まえた上で、小学校における社会科という学習の中でも、その時々々の政治の緊急性や子どもの実態に合わせて実施していくことが重要なのである。そして子どもたちに、社会の中の多様な考え方や価値観の存在を知らせ、自ら批判的に考える力や判断力の育成こそが、これからの社会科教育の中では最も重要になってくると受け止める。

(3) コンピテンシーベースの「社会」から「政治的リテラシー(お茶小版)」を考える

教育の質的転換が叫ばれている中、社会科は授業の内容の構成に重点を置くだけではなく、社会科でどのような資質・能力を育てていくべきなのかを、打ち出し、コンピテンシーベースの社会科にしていかなければならない時期にきている。本校社会部では、「政治的リテラシー」の定義と、「政治的リテラシー」の4つの要素について以下のように考え、育てたい資質・能力を提案してきた。

お茶大附属小の「社会」部が提案する「政治的リテラシー」とは、

「社会・政治問題について争点を知ること、学校での意思決定の経験を通して、争点に関する多様・多面的な反応・政策・対立を知り、争点や問題解決にかかわる重要な知識を生かして、利害の異なる自他への影響を考えながら、根拠を明らかにして主張したり、反論を想定しながら聴いたり、応答しながら反駁をしたりして、自分の判断の規準（価値観）にしたがって意思決定を行う能力のことである。」と定義した（2016年2月 お茶の水女子大学附属小学校 公開研究会要項より）

「政治リテラシーの樹形図」（バーナード・クリック作成）、「公共性リテラシー」（本校旧市民部作成）から、お茶大附属小の社会部が提案する「政治的リテラシー」の4つの要素を以下に抽出した。

- i = 社会的事象や時事問題の対立点、論点や、それらの背景となる基本的事実を理解する。
- ii = 社会的事象や時事問題の対立点、論点について、多面的（他者の視点）な見方で考え、自分の考えへの反論を想定する。
- iii = 読みとった情報・知識を、自分の主張の根拠にして聴き合い話し合う。
- iv = 様々な立場の人が幸せになれる条件を考えて決定する、

これらは、「子どもの学習過程」を観点にして抽出したものである。子どもたちに指導する教員にも発想しやすく、リテラシーの要素を漏れなく指導できる利点がある。

（4）今年度の重点課題は「判断の基準」

社会・政治・時事問題の論争点について、様々な立場の人々になって考え話し合う学習経験を積むことによって、多面的に考える力が育てられるのは、日々の学習の中で実感している。溝口（2002）は、「社会的対立において何が自己にとっての問題であるかを明確にしていくことの重要性は、自分の中にそれを問題と見なす判断基準を作り上げていくこと。個人の中に、論争問題における判断基準を多様にもつことができればできるほど、多様な側面から問題を捉えることができるはずである」と言う²。また、大杉（2011）も、「『価値』について批判的な視点をもって学ぶ機会がなければ、生徒は社会に散在する『価値』に無防備にさらされ、無意識のうちにそれを受け入れてしまう」³と主張し、社会科の役割を訴えている。このように「政治的リテラシー」の涵養には、有権者になる前の小学生という発達段階から、社会的な諸価値への無防備・無垢な状態からの脱却をあえて促し、自ら考え判断でき、これからの民主主義社会を支える市民へと育成していくことが大切である。このことこそが、我々教員に課せられた使命であると考え。そこで、先の「研究の内容」から述べてきたように、子どもたちにできるだけ「判断の基準」を多くもたらす、社会・政治・時事問題から、問題設定や学習過程を考え、第3学年から第6学年までの多岐の単元にわたり、多くの実践を積み重ねてきたのである。

例えば、社会・政治・時事問題において、最も根源的な価値観の対立によって生まれる「争点」がある。その「争点を知る」過程の中で、様々な人々の様々な声からその問題の「判断の基準」を学んでいくという手法。また、論争問題においてロールプレイを通して3者（個人・地域・行政）の立場に全員が立つことで、違った見方ができるようになり、「判断の基準」を増やしていくという手法。さらに、論争問題において、「判断の基準」がいろいろある中で、どの「判断の基準」を優先していくかという、「優先順位」について考える手法など、いろいろな迫り方に取り組んでいるところである。

本要項の実践事例では、「争点を知る」過程を通して、「判断の基準」がどのように育まれて、子どもたちの思考がどのように変容していくかについて、さらに深く掘り下げて、検証していきたい。

2 授業実践から見た子どもたちの学ぶ姿

（1）題材名 「公園に自動販売機を置くことについて考えよう」（第3学年）

（2）単元の概要

学校の近くの新大塚公園の新しい公園整備計画を取り上げた。実際の意見交換会の中で生まれたいくつかの対立点の中で「公園に自動販売機を置いたほうがよいか」という地域の問題を子どもたちに考えさせた。子どもたちの意見は当初から様々な意見に分かれていた。自動販売機を設置した方がよいという意見の中では、災害時用の自動販売機がある事実から、万が一の時に備えるべきや、人の命にかかわる重要性などが挙げられている。一方、設置しない方がよいという意見の理由は、空き缶ごみの問題

や電気代、自販機荒らしという犯罪の問題など多岐にわたっている。これらの意見がぶつかり合う中で、この問題を判断するためには何が根源的な価値観の対立なのかを、教員がかかわりながら、子どもたちが見出していける授業を展開していこうと考えた。そして、その過程でこの問題を判断するための様々な「判断の基準」について、考えを深め合うことが、子どもたちにとっては「政治的リテラシー」の涵養のために重要なことであると考えた。

(3) 学習指導計画 (5時間)

①新大塚公園をつくるにあたって出てきた問題を知り、第1回目の価値判断を行い、考えを発表し合う。

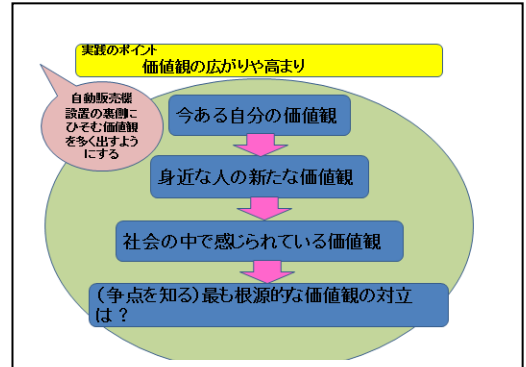
新大塚公園に、自動販売機をおいた方がよいだろうか

②家の人にもインタビューし、さらにその考えをふまえて、考えを発表し合う。

③新聞記事などから自動販売機を置くことに対するよい点や問題点を知り、第2回目の価値判断を行う。

④自分の考えを、証拠の事実をあげながら、考えを述べ合う。

⑤文京区役所の方から、実際の世の中の判断のプロセスと結果を伺い、自分の考えをまとめる。



(4) 児童の思考の変容と「判断の基準」 *+は「設置する派」の判断。-派「設置しない派」の判断基準。

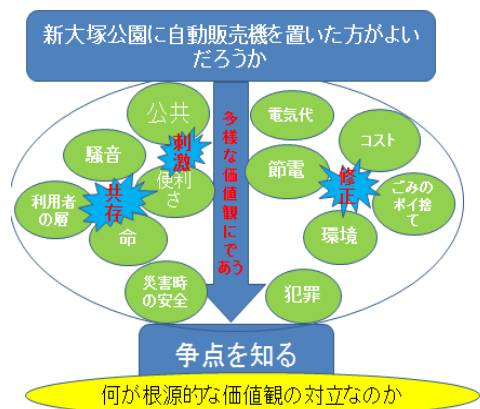
子ども	S 児	H 児
第1時	「新大塚公園に、自動販売機をおいた方がよいだろうか」という問題に対して、第1回目の価値判断を行い、考えを発表し合う。	
※は○は「設置派」 ×は「設置しない派」	○置いた方がいい。理由は、 <u>水筒などを持ってくるのを忘れる人がいたら、自動販売機ですぐに買えるし、夏で公園で病気になったら水が必要です。何か大変な時に、水や飲み物は役立つので必要です。のどが渴いた時に、家にいったん帰らなくてもすむし、すぐには買えば水分も補給できるから。</u>	×自動販売機はあまり使っている人を見たことが少ないのに、 <u>町中にたくさんあるから、あまり必要はないと思う</u> 。もし水を飲みたいなら水を飲めばいいし、お茶がほしければコンビニで買ったりして帰ってくるのもいいし、ソーダなど買いたければコンビニでいいと思う。 <u>設置にお金もかかるし、置かない方がいい。</u>
判断の基準	+便利さ +大切さ	+自動販売機の必要性 -設置代
話し合い後	○公園に初めて来た人でも印象がよくなると思う。 <u>人々のために考えているから。</u>	×自販機はあっても <u>ポイ捨てが増えるだけだ</u> と思います。やっぱり自販機はない方がいいと思います。
判断の基準	+公園の印象 +公共	-ポイ捨て
第2時	家の人にもインタビューし、さらにその考えをふまえて、考えを発表し合う。	
振り返り	○置いた方がいいと思う。 <u>公共施設なので、もしものことを考えて置くのはあたり前だ</u> と思う。 <u>もしものさいがいの時のことを考える。</u>	×置く方のいいところは、 <u>災害時に無料で飲み物をくれること</u> 。置かない方のいいところは、 <u>4590億円に+17万円になってしまうこと</u> 。
判断の基準	+災害時 +公共	+災害時 -電気代
第3時	新聞記事などから自動販売機を置くことに対するよい点や問題点を知り、第2回目の価値判断を行う。	
第二回目の価値判断	○置いて悪いことはあるけど、それはふせげる。自販機は <u>もしもの時に役立つし、置かない方がいい</u> と思っている意見をこれから自販機の工夫につなげて生かしていけばいい。	×①ガチャンという音がうるさいと近所の人が出ている。②莫大なお金がかかる。③ポイ捨てがあると、 <u>せっかく緑が多くて気持ちいい公園なのにふゆかいになる</u> 。
判断の基準	+災害時 -一面の理解	-騒音 -コスト -本来の公園の意味 ①③の新たな判断基準がこれまでの過程の中で生まれた。
第4時	自分の考えを、証拠の事実をあげながら、考えを述べ合う。	
最終の話し合い後	○ポイ捨てだと置かない方がいいし、 <u>災害時だと必要な</u> ので、どちらもいい方があるので迷いました。けれど、 <u>もしもの時に命がすくわれるかもしれないので置いた方がよい</u> 。	×一番迷っているのは、 <u>災害時のことを大切にするか、ふだんのことを大切にするか</u> 。災害というのは、 <u>しょっちゅうおきる物でないから、ふだんのことを大切にする</u> 。
判断の基準	-ポイ捨て +災害時 → 命の安全	自分の中に新たな「真の争点」が生まれている。

思考の変容の考察	S児は、初めから設置する考えを貫き通している。初めは、自販機があるとすぐには買える便利さや病気になるたら水が必要という命の安全のことをあげていた。最終判断の前までに、設置することのマイナス点も認めているが、最後には災害時のことをあげ、もしもの時に命が救われるという理由で設置する判断をした。命の安全とい価値判断が、病気になるたら水が必要から、万が一のことも想定した判断に成長していることがわかる。	H児は元々、便利な世の中に批判的な価値観をもつ生活経験の持ち主。自販機の設置には、初めから反対意見を述べている。話し合いの度に、新しい価値観が対話的学び通してH児の中に生まれ、災害に無料で配られる良さと、自販機を置くマイナス面で自己内対話を行っている。そして、公園がもつ本来の意味や新たな視点として、普段のことを大切にするか万が一のことを重視するか、自分なりの「争点」をもちながら、判断している。
----------	--	--

(5) 実践の成果と課題

①成果

「争点を知る」過程の中で、子どもたちは、様々な「判断の基準」と出会い、正対することができた。S児は、初めはすぐには買える「便利さ」という個人的な「判断の基準」をあげていたが、インタビューや新聞記事など他者からの話や、学級内での対話的学びを通して、災害時の「みんな」の立場に立った社会的な「判断の基準」に基づいて考えられていた。これを高まりと捉える。また、H児は、初めから、社会的な「判断の基準」に基づいて本問題を考えている。さらに、反対の立場を終始貫き通しているが、その過程においては常に賛成派の考えも受け止めながら、多様な「判断の基準」で考えるに至り、自己の中で葛藤しながら迷い悩んでいる。そのことが、自分の考えを広げ・深め・高めることにつながっていると考えられる。



②課題

「政治的リテラシー」を涵養するためには、もう少し論点を絞った上で、子どもたちが論争できるように授業を進めることが、教師には求められたことを、この実践を終えて実感している。今後さらに研究を継続し、発展させていきたい。

3 今後に向けて

(1) 成果

小学校でも、学年の発達段階に合わせた社会・政治・時事問題を取り上げることで、「判断の基準」に基づいて自分の考えを広げ深め高めることができ、「政治的リテラシー」を涵養することができる。また、このような学習経験を各学年ごとに積み重ねていくことで、高学年では、政治的な対立や社会的価値の論争について議論できるようになると考える。だから中学年からでも積極的に身近な社会・政治・時事問題を取り上げていくことが、大切である。

(2) 課題

他者の視点に立って社会・政治・時事問題を考えることで、今まで気づかなかった「判断の基準」で考えることができるようになることは、自分の考えを広げることにつながり、他者との対話を通して深められる。では、自分の考えを高めるとは、個人的な「判断の基準」から社会的な「判断の基準」に高まっていくことだと考えているが、今後さらに追究していきたい。

(岩坂、岡田泰、佐藤)

¹ NHKwebsite「18歳選挙権に何を思う」(<http://www.nhk.or.jp/d-navi/link/18survey/>)，最終閲覧,2017年1月5日

² 溝口和宏(2002)「開かれた価値観形成をめざす社会科教育—『意思決定』主義社会科の継承と革新」全国社会科教育学会『社会科研究』第56 p.33

³大杉昭英(2011)「社会科における価値学習の可能性」『社会科研究』第75号、全国社会科教育学会、pp.1-10.
